

# 中國出土資料學會會報

2025年12月6日 第81号

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 小寺研究室内 中国出土資料学会（事務局）

Tel : 03-5841-5843 e-mail : office@shutsudo.jp

<http://www.shutsudo.jp/>

## ◆目次◆

2025年度第1回大会（総83回）報告.....	1
特別寄稿：「出土資料研究と人文情報学の接点」	
片倉 竣平（東北大学）.....	3
学会彙報.....	4

《2025年度第1回大会（総83回）報告》：2025年7月5日（土）

早稲田大学戸山キャンパス 36号館 681教室

ハイブリッド開催

### （Ⅰ）荊門“大歲闢兵”戈補議

高潔（南京大学文学院博士後期課程・  
東京大学東洋文化研究所訪問研究員）

荊門“大歲闢兵”戈在1960年出土於湖北省荊門市漳河車橋戰國墓，銅戈正反兩面均有銘文、陰刻花紋及凸鑄神像。圍繞此銅戈有若干爭議問題，例如銘文的閱讀順序、“闢兵”的含義、應釋為“大武”還是“大（太）歲”、其所指為何物、圖像的含義等。本文嘗試梳理學界近年來對此銅戈的討論，並提出一些新的看法。此銅戈的銘文當釋讀為“大（太）歲闢（辟）兵”，其中“歲”應分析為从戈从兩止，只是上部一“止”寫得不太規範，易引發誤解。“辟兵”意為辟除、排開敵方兵器。太歲為紀年神煞，援上的凸鑄神像也是太歲。銘文、神像中的太歲與馬王堆漢墓帛畫《太一將行圖》的主神“太一”並非同一神。銅戈內上圖樣為龍，很可能是為了進一步強調神像身份而刻畫。

### （Ⅱ）試論東漢石祠畫像模式的形成——以西王母、東王公的位置關係為中心

左紫薇（四川大学考古文博学院博士後期課程）

近年來，已經有一些學者對東漢石祠畫像的模式化問題提出了一些個人看法，但仍存在一些討論的空間。隨著材料的不斷豐富和研究的逐步深入，通過重新梳理東漢時期的畫像石祠材料，能夠系統地討論石祠畫像模式的形成過程及其相關問題。

東漢早期，石祠畫像的固定模式初現雛形。象徵神仙世界的西王母、日月等形象通常出現於石祠最高處；樓閣宴飲圖固定配置於石祠後壁，庖廚、樂舞圖大多配置於石祠東壁。

東漢中期，石祠畫像逐漸“格套化”。西王母與東王公形象並排出現於石祠最高處，但並未相對而坐；庖廚、樂舞圖皆配置於石祠東壁，歷史故事圖通常配置於西壁，三壁底部還出現了首尾相接的車馬出行圖。

東漢晚期，形成了較為完整的圖像敘事。東王公和西王母形象固定設置於石祠東、西二壁頂部，相對而坐，分庭抗禮；樓閣宴飲圖與車馬、拜謁場景形成固定組合，設置於後壁，庖廚、樂舞圖固定配置於東壁，西壁大篇幅配置歷史故事圖；車馬出行圖固定配置於三壁底部，形成前後連貫的場景。

同時，社會上層的東王公信仰和陰陽對立觀念逐漸下移。西漢時期，東王公已經作為西王母的對偶神在表現社會上層觀念的器物上出現了；東漢早期，東王公雖然在表現社會下層觀念的石祠上也出現了，但並未與西王母相對而坐，說明社會下層的東王公信仰尚未與陰陽對立觀念結合；直到東漢晚期，石祠中才形成西王母與東王公分置兩壁、分庭抗禮的固定模式，社會上層與下層之間關於東王公信仰的觀念實現了徹底融合。

### （Ⅲ）前漢初の吏と宦皇帝者

内山峻（明治大学大学院博士後期課程）

本報告は、前漢初の官吏と宦皇帝者がどのような関係にあったのかを明らかにすることを目的とした。まず第一節では、「宦爲吏」が何を指すのかの検討から入り、「功令」に見える「宦」とは空間的・物理的に宮中に入り内官となることを指し、それ故、「宦者」の出自禁止を意味する語は「出」宦となる。こうしたことから宦となることと吏となることには区別があるとして、「宦爲吏」は「宦える・吏と爲る」と訓読し、内官・官吏となること、「毋得宦爲吏」は、内官にも官吏にもなれないことを意味するとした。

続く第二節では、「二年律令」や「功令」にも六〇〇石以上の官吏への優遇が見られ、それらと宦皇帝者が併記されていることから、宦皇帝者も六〇〇石に準じる扱いを受けていたと結論づけた。またこのような理解に基づき、『漢書』景帝紀の景帝後元二年の詔は、すべての官吏に対する賞産規定ではなく、宦皇帝者にたいするものとして見るべきと結論づけた。

最後に、先行研究で宦皇帝者として扱われる謁者と郎官に注目し、謁者は『漢書』百官公卿表では、宦皇帝者でありながら、漢初には六〇〇石の秩石を有しており、外吏と課を通じることや、宦をやめても宦に戻れないことなど、宦皇帝者とそうではない官吏との中間的な存在であるとした。また、中郎、郎中、外郎は、漢初から秩を有しておらず、宦をやめても望めばまた宦となることができ、「出」して吏となることも可能であった。宦皇帝者はやめた後も、「半官半民」のような正式な吏でない立場に就けるようなことは令によって禁じられていたことを指摘した。

## 《特別寄稿》 「出土資料研究と人文情報学の接点」

片倉 竣平（東北大学学術資源研究公開センター・  
特任講師）

昨今、「人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ：DH）」という言葉を目にする機会が増えていることと思います。人文情報学とは、定義はさまざまですが、人文学と情報学との学際領域のことを指します。文系・理系の枠組みを横断して研究の幅を広げる試みです。日本でもこの十数年で基盤整備が進み、大学・博物館・図書館等の協働プロジェクトが相次いでいます。画像基盤（閲覧・共有）の整備、メタデータ（データの来歴や性質を示す「データのデータ」）の標準化、テキストデータへの翻刻作業、成果公開のプラットフォーム化などが、教育・研究・公開の循環の中で位置づけられてきました。教育面では、「東京大学人文情報学部門」「九州大学人文情報連携学府」「京都大学人文情報学創進センター」などが組織されております。筆者の所属する東北大学では、2023年に設立された「統合日本学センター」に、人文情報学に関わる研究者が多数所属し、学内のアーカイブ・研究部局・図書館と連携しながら基盤整備と活用を推進しています。大学組織以外では、「一般財団法人人文情報学研究所」が国内の研究動向の可視化や国際連携の窓口として重要な役割を果たしています。

この潮流は中国でも顕著で、「北京大学数字人文研究中心」、「中国人民大学数字人文研究中心」、「武漢大学数字人文研究中心」など、各大学で学内横断のセンターが相次いで整備されています。各組織では、授業・共同研究・ワークショップの継続に加え、研究に有用なツール（閲覧・検索・可視化）の試作と公開、成果の冊子化・論集化が並行して進められています。

出土資料に表れる古漢字の領域でも、デジタル資源はもはや付録ではなく前提へ移りつつあります。例えば、復旦大学の出土文献与古文字研究中心が出版した教科書『出土文献与古文字教程』（復旦大学出土文献与古文字研究中心編、中西書局、2024）では、「古文字工具書与数字化資源」が独立章として設けられ、紙の工具書に続けてデジタルリソースが紹介されています。同章の前書きには次のようにあります。「学術研究の進展に伴い、古文字の工具書の編纂形式はすでにある程度成熟してきたが、大きな課題にも直面している。それはデジタル化への挑戦である。したがって、古文字の工具書の発展の見通しとしては、成熟した編纂方法と豊富な経験を活かし、古文字データベース構築を推進すべきである。同時に、様々な種類の検索方法を融合させ、点を線に繋げ、さらに面へと広げ、多層的で立体的な古文字データベースの構築を目指すべきである。」（p.184 ll.5-8：筆者訳）すなわち、紙の工具書で培われた蓄積を足場に、ここから更なる発展を目指すためにはデジタル技術を援用すべきであるという姿勢が明確に打ち出されています。

筆者は現在、古漢字の「解説情報」を総合的に検索できるデータベースを整備する研究を進めています。設計の要点は単純で、各文字内に並立する複数の解説（隸定と、各研究者による様々な釈読）を併記し、出典（誰がどの文献で提示したか）と位置（資料名・篇名・簡番号・出現順）などのメタデータで結びつけ、後から機械的に検索・抽出できるようにすることです。古漢字の解説情報を扱う場合に課題となるのは、①複雑な字形（いわゆる外字）をどうテキストデータ化するかと、②複数の研究者が異なる解説をしている場合にどう扱うか、あたりが大きなものでしょう。①は、IDS という技術を利用して一部対応しました。IDS というのは、構成要素を組み合わせ

せることで一文字の漢字を示す記述法で、例えば「字」という字は「𠄎子」と表せます。こうした記述を用いれば、複雑な隸定も分解してテキストデータとして示すことができますし、構成要素で検索することが可能となります。②は、表を用いた並列記述をまず着想しました。

実装は段階的に行い、当初は Excel/CSV の二次元表で運用していましたが、一方でより柔軟な利用を追求するために、テキスト構造化 (TEI) や語彙・識別子連結 (RDF) といった表現力の高い記述法を併用して機械可読性と相互運用性を高めようと試みている最中です。

将来的な計画としては、画像側の基盤 (IIIF 等) と緩やかに接続し、該当箇所の高ライト、注記のオン・オフ切替といった閲覧機能に段階的に広げる計画です。(このあたりは、画像利用の権利問題と関わってくるので、課題が多く残っています。)

そして、各所で喧伝される AI 利用についても、将来的に踏み込めるよう備えを進めています。AI にデータを分析させるには、コンピュータが容易かつ適切に読み取れる記述を整えておくことが前提となり、その準備ができれば活用の幅は着実に広がります。もっとも、どのような手順で実装するか、そしてそもそも AI に何を担わせるかといった課題は残されています。これらを見据えつつ、国内外の研究者と連携しながら研究を前に進めていきたいと考えています。

## 《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 2025 年度第 1 回大会 (総 83 回) が、2025 年 7 月 5 日 (土) に早稲田大学で開催されました (ハイブリッド開催)。

○会報委員会より

(1) 会報 (年 2 回発行) は 2020 年度から学会ウェブサイトにおいて公開することといたしました。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなどしております。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ご登録のほどよろしくお願ひいたします。

(2) 2012 年 7 月 21 日に開催された臨時総会において、「中国出土資料學會著作権規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第 46 号 (2011 年 3 月発行) から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP 掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年 2 回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料學會會報』は、新しい学術情報をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様相、学会参加記、新刊紹介など、広く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を廃止し、下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

- ・ご投稿の際は、メール(宛先: [office@shutsudo.jp](mailto:office@shutsudo.jp))で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。
- ・ファイル形式は、WORD(～.docx または、～.doc)形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。
- ・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。
- ・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されない場合は、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第30号の締切について

2010年度大会(2011年7月16日開催)、2011年度大会(2012年3月10日開催)および2023年度大会(2023年7月1日開催)にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第30号の投稿締切日は、2025年12月末日です。会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○事務局より

(1) 事務局では中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、大会案内等紙媒体の送付停止、および学会ウェブサイトとメールでのご連絡を継続することといたしました。ご不便をお感じになる方もおられるかもしれませんが誠に恐縮ですが、どうぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

(2) 年会費は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号：00180-5-13124 受取人：中国出土資料学会

なお会費は、  
通常会員・準会員 年額4000円  
学生会員・海外会員 年額2000円 　　です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

[office@shutsudo.jp](mailto:office@shutsudo.jp)